

## 《追悼文》

## 小野宗三郎先生を偲ぶ — 大学紛争のなかでの研究会の発足

元大阪府立大学学長で生物物理化学が御専門の小野宗三郎先生には、去る5月17日未明心不全のため逝去された。83才であった。先生は少し年配の方々には共立全書の「物理化学」, 「物理化学実験法」, 「物理化学演習」等の著者として知られているが、生化学系のカロリメトリーの先達のお一人として、本学会の創成期に大変御尽力された方でもあるので、先生の御紹介を兼ねて御貢献を偲んでみたい。

小野先生は1933年京都帝国大学理学部物理化学研究室(堀場信吉研究室)を卒業され、引きつづき大学院に進まれた後、京都大学化学研究所に奉職された。1949年新制大学としての浪速大学(現大阪府立大学)の創設に参画され、農学部の生物物理化学研究室の初代教授に就任されて以来、1975年に学長職を最後に引退されるまで、大阪府立大学で多年にわたり多くの業績を残された。戦前の堀場研は50人以上を容する大所帯で、その業績は毎年刊行されていた「物理化学の進歩」で知ることができるが、小野先生は、分散系の熱力学、金属薄膜の触媒活性、陰極線オッシログラフ、澱粉粒の超音波崩壊などの論文を34年から41年にかけて発表されているものの、堀場先生の始められた熱解析については御自身でされた記録はない。しかし、同門の水渡、神前らのカロリメトリーの論文にはずっと関心を持っておられて、後にアミラーゼ反応の熱解析をされた後輩の広海啓太郎氏(京大名誉教授、現福山大学教授)を助手にお迎えになり、大学院生としての佐納良樹氏(現信州大教授)や筆者が大阪府立大学でこれらのテーマを引き継ぐことになった。

さて、筆者がカロリメトリーを始めるきっかけは、このような小野先生の堀場式カロリメーターに対する想い入れからであるが、当時は必ずしも反応熱のエンタルピー変化測定を目的として開始したわけではなかった。むしろ、熱を指標とした反応速度解析を狙ったものだったのである。しかし感度的な制約のため、反応熱カロリメトリーに徹するよう軌道修正の決断をされたのが1961年頃である。筆者が学位論文をまとめる頃、関集三先生、藤代亮一先生らが第一回の熱測定討論会を準備されていることを知り、近くの大阪市立大学の藤代先生に相談されてお仲間に入れて頂くことになった。酵素反応という生化学系のカロリメトリーは私達の発表が唯一のものであったが、当時、スウェーデンでのIUPAC総会の報



小野宗三郎 著「回顧録」(1975)より  
丸山石根 画

告をされた関先生は特に生物分野での熱力学データの重要性が認識されつつあることを述べられ、大変な激励を受けたことは忘れられない。

東京、大阪で交互に開催されていた討論会は、第5回を迎え小野先生がお世話されることになった。この討論会は今日の学会の誕生につながるステップの一つとして重要な意味を持つものであった。すなわち、日本化学会の一分子会から離れて熱測定研究会が発足したのである。しかしその頃は、世界中を吹き荒れていた大学紛争の末期で、いずれの大学も研究室の封鎖やゲバルトで揺れ動いている頃であったから、事務局をお引き受けされた小野先生の見えない部分での苦労は大変であったことをお手伝いした筆者も鮮明に記憶している。勿論、科学技術社の松本直史氏の御支援があったとは言え、研究会設立の趣意書と入会案内の発送、振込口座の開設と会費の受け入れ、設立総会に際しての資料の準備などをこなし、関先生らが描かれていた夢を実現することができ、とても御満足の様子であった。

大学紛争の最中、大阪府立大学では学長職代理を務められ、そのまま引きつづき1970年に学長職に就任されたが、二足のわらじを履くことを好まれず、教授職を辞されたため、研究とは疎遠になって行かれたのは時代の流れとは言え、先生の本意ではなかったことは言うまでもない。学長職に在任中は紛争を終息させるために多大な労苦を自らに課せられたが、その誠実なお人柄のために優れた人材が周囲に集まり、この困難な仕事を支えた。そうした社会的背景のもとで比較的早く現役研究者の立場から離れざるを得なかったため、学会で自ら表に出る

ことは控えておられたが、私ども門下生の研究の展開には常に気を配られ、最近に至るまで終始お励まし下さったことには感謝の念で一杯である。

学長職の任期満了とともに私生活に戻られるはずが、その後も関西新空港調査会を始め、数々の社会的要職を務められたのは立場上仕方ないことであつたと思われる。1993年10月に永年たしなまれてきた俳句を奥様と共著で「浜寺八十年」という句集にまとめられたが、これにはかなりの精力を注ぎ込まれた御様子で、その完成と同時にこれまで蓄積された心労が一挙に吹き出たかのように、お伺いすると弱音をはかれるようになり、4月

27日に急性肺炎で入院され、回復されぬまま不帰の客とられた。

学会創設30周年を迎えるにあたり、先生の御逝去を時の流れとして実感せざるを得ないが、同時に次のステップへの新たな飛躍を小野先生の霊に対してお誓い申し上げたい。

肖像画について：御親交のあつた丸山石根画伯が描かれた小野先生像。丸山画伯は学者としての厳しさが抜けているのでは、と気にしておられる。

(大阪府立大学農学部) 高橋克忠

---

## ICTAC第2代会長C. B. Murphy氏のご逝去を悼む

国際熱分析連合 (ICTA) (現在は国際熱測定連合 (ICTAC)) の第2代会長 (1968-71) を務められた Cornelius Bernard Murphy 氏 (通称 Connie) が本年4月2日に75才で逝去されました。氏はアメリカで生まれ、Holy Cross College で化学を学び、同校助教授 (1945-52)、American Cyanamide 社 (1953-55)、GE 社 (1956-64) と移り、最後に Xerox 社 (1965-82) において分析部門を統括するとともに、カラーコピーや磁気コピーの研究に寄与しました。

C. B. Murphy の名前は、Anal. Chem. 誌の「熱分析」部門の総説を1958年から2年毎に書き、熱分析の技法に対する興味を喚起したことで世界に知られています。また、2代目会長として ICTA の発展に尽力し、Mettler 賞と DuPont-ICTA 賞を受賞されました。日本における熱分析の発展も Anal. Chem. 誌を通じて氏の恩恵に預かるところが大きかったと思います。C. B. Murphy 氏のご冥福を祈ります。(埼玉大学理学部 柴崎芳夫)